

ICT 機器を活用した授業のための教職員研修の推進

－研修でのアツイ刺激を参加者に残していくために－

宮城 渉（金武町立金武中学校）・中龍馬（那覇市立高良小学校）
馬淵大輔（那覇市立松川小学校）・山入端一哉（うるま市立中原小学校）

概要：「ICT を活用した授業づくり」を目的とした沖縄県マルチメディア教育研究会が、県内教職員とともに研究活動を進めていくために取り組んできたことをこれまでのノウハウを交えながら、今後の可能性を探ります。

キーワード：研修、授業設計、タブレット端末、業務改善

1 はじめに

沖縄県マルチメディア研究会は平成6年から「ICT を活用した授業づくり」について、理論研究と授業実践を重ねてきました。その成果を毎年公開授業を中心に研究紀要としてまとめることで、県内小中学校に普及促進をしてきました。他にも教職員を対象に「Teacher's night in Okinawa」を随時開催し、研修を実施してきました。

そこで、今回は教職員対象の研修を実施する際に本研究会の基本的な考え方について紹介していきたいと思います。

2 研究会が考える教職員研修

（1）研修内容

過去5年間実施した研修をまとめると、「電子黒板を活用した授業づくり」「実物投影機を活用した授業づくり」「デジタル教科書を活用した授業の方法」「タブレット端末を活用した授業づくり」など、すでに学校で導入されているICT機器についての研修、「情報モラル」「プログラミング教育」「生徒実態把握の方法」「学校現場の業務改善」などの各学校や自治体の喫緊の課題についての研修、「ipad や iPhone など先生個人で所有している機器を活用した授業づくり」についての研修など多彩である。

（2）実施までの流れ

①依頼主との打ち合わせ

日時・会場・ICT機器の整備状況・参加人数・研修内容などについて担当者と事務局で詰めていく。事前にアンケートを取ることで実態把握しやすくなります。

②講師の決定

打ち合わせで決まった研修内容について、研究会で対応できる内容と企業に依頼する内容に分ける。特に研究会会員所属校で導入されていないものを利用した研修依頼の場合は、企業に依頼する。研究会で対応できる部分については会員で講師を調整する。打ち合わせは、毎月開催している定例会やZOOMやLINEのテレビ会議を活用する。

③ワークショップの事前準備

研究会の研修の特徴は、ワークショップである。そのためのノウハウは、研究会の財産でもある。座学だけでなく、参加者の交流の場を設けることによって、さらに見識を深めることができます。時間は70～90分間で、1つのグループを最大5人とする。グループ内の交流を深めていくための触媒を何にするか？が重要である。ホワイトボードやタブレット端末、embot やロボット、i-check やアセスの児童生徒データなど研修内容によって様々である。

④研修実施

研修では、参加者が研修内容を持ち帰りやすいような工夫をする。研修終了後に振り返りやすい配布資料の準備、参加者のスマートフォンやタブレットなどに研修と同様の環境を構築していくなどである。

⑤研修終了後

事後アンケートをマークシートや google フォームなどで集計することによって、参加者にフィードバックできるようにする。

また、経年研修や公開授業など授業づくりの相談があった場合は、研究会から指導者を派遣してポイントを押さえながら支援していく。

他にも研修と同様の環境がない参加者には、iPad やモバイルルーターなど必要な台数の貸し出しを行うことで「授業者がワクワクする授業づくり」の支援を早いうちに行うことで、研修後の関係を築くことができる。

研修に参加している先生方は「学習内容を児童生徒に教えたい」「勉強は楽しいものであることを伝えたい」というモチベーションがあるので、成就させてあげることが、研究会の存在意義と考えている。

3 研修内容の効果測定について

研究会が考えている研修内容の効果測定の指標が2つあります。「事後アンケート」と「研修内容の振り返り」です。

(1) 研修直後のアンケート

・紙媒体のアンケート

紙で配布するマークシートタイプのアンケート。集計結果を即時閲覧することはできないが、ほぼ確実に回収可能。

・google フォーム

参加者に対して1人1台の環境である場合、有効である。URLを参加者に一斉送信したり、QRコードを読み取ることで、アンケート入力画面へ進むことができる。入力までの流れは慣れが必要だが、何回か繰り返すことによって、作業はスム

ズになってくる。また、集計結果を公開することが可能である。

(2) 研修内容の振り返り

研修終了後1ヶ月後に参加者を対象にしたアンケートを配布することで振り返り状況を追跡調査する。主な内容は「研修内容を周りの先生に話しましたか?」「研修内容を授業や学校業務に活用しましたか?」である。また、参加者にアカウントを配布した場合は、研修後にログインしたかどうかを確認することができる。ログインしていない参加者には、刺激を受けた参加者の実践を紹介することで、熱が冷めないようにしていく。

4 考察

アンケートによると参加者の研修満足度は高い。また、自由記述欄のアンケートでは、研修の感想だけでなく、今後の活用に向けての意気込みについての記入が多く見られた。ただ、実際にプログラミング関連の授業を実施する際の不安についての記載もあった。他にも、今後の授業づくりを一緒にできたらという相談もありました。

5 結論

研修をより良いものにするために必要な要素

- (1) 参加者の実態把握
- (2) 参加者の研修内の交流の場
- (3) 持ち帰りやすい資料
- (4) 参加者の追跡調査
- (5) 経年研修の支援
- (6) 不安解消のための環境構築

6 今後の課題

- (1) 理論研究と授業実践
- (2) 充実した研修の設計
- (3) 魅力的なコンテンツの提供
- (4) 県内外の研究会間での研修の交流
- (5) 授業者支援のための環境構築